# 勇者が次期魔王を愛しすぎてる件

焼きおにぎり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者が次期魔王を愛しすぎてる件

【Ｎコード】
Ｎ８３１８Ｖ

【作者名】
焼きおにぎり

【あらすじ】
…近頃、次期魔王こと我には頭を悩ます物がある。…あぁ…何故このような事に…？我はただ…平和に暮らしたかっただけ…ー

## 第一勝　我、次期魔王（前書き）

題名そのまんまな話。小説初めてなんでかなりグダグダですー（´∀｀）ぬるいですがボーイズラブはいりますんでお気をつけて！！ヨロシクです。

## 第一勝　我、次期魔王

「ふっ…今日はいつになく良い朝だな…」

空を漂う雲はどす黒く、時に稲光が走り回り…直後和太鼓を思わせるあの音ー…

「美しい……！そしてこの搾りたて牛乳１００％入りミルクティーのなんたる美味なことか…！！まさしくマイルドッ！！」

君の乳に乾ぱ…「アンゼルッッッ！！！！！」

「ブバァァァッッッッ！！！！！」↑噴射

顔面直撃→「！！！？やったぁぁッッ！！アンゼルと間接キっ…キスだぜヒャッホウッッ／／／／！！！！！」

「変態勇者ァァッッ！！？お主まだ生きておったのかッ？！！！」

「キスっ…キっキス…うへへへ…／／／／」

「　キモッッ！！…いやしかしそんなはずは…ッ！？何故貴様が生きてここにおるッ？　！確かにこの手で葬ったはず…？！！」

「フフフ…このオレがアレごときで死ぬわけないだろう？？むしろ…ＳＭプレイにしたって足りないくらいだぜ！！」

きらめくほどのどや顔…やり過ぎてしゃくれているのが更に腹立たしい…！

「ぬぅ…！！やはり後頭部を鈍器で殴りつつみぞおちに拳を叩きつけ更に鼻の下にう〇こ香水を塗りたくりついでに毒を盛り仕上げに手足を縛りサメ共のうようよ住んでおる海に蹴り落とす―（しかも重り付き）程度では甘かったか…！！」

次期魔王ーアンゼルはがくりと膝から崩れ落ち、ああ…あの時香水ではなく、犬のう〇こそのものを塗りつけてやればよかったと悔

し涙を流し、己の甘ちゃんぶりを呪った。ついに我の平和を取り戻したと思ったのに…チクショウ！！

「ドンマイ！！」

「ムカつくッッ！！」

「アンゼル…そう落ち込まないで…お前の涙を見ているとオレは…オレは！！ズボンがはち切れそうになるんだぁぁッッマイハニーッッ／／／／！！」

「黙れ変態がッッ＃！！」

「『レイド』って名前で呼んでくれよ…なんてったって俺達は運命の赤い糸で繋がった『勇者と魔王』なんだぜッ／／／／！！！」

はにかみながらも本日二回目のどや顔でニッと胸を張る変態勇者…こやつはどうやら大きな思い違いをしておるらしい。…というかむしろ思い違いしかしておらんか。

「よいか変態勇者よ…何度も申したが、我は貴様の申す『魔王』ではない…この魔界の【未来】を照らす『次期魔王』なのだ。…わかるな？」

「もちッッ！！」

いちいち親指を突き立てるな。折ってやろうか。

「…そして貴様は人間共を光へと導く…のか？…は知らんが、とにかく【今】を輝く『現勇者』…」

「うんうん！…アンゼルの声はいつ聴いても透き通っていてどこか儚げで…且つ、魂を揺さぶられるかの如く芯の強いメロディ…！美しいなぁ…／／／／（，∀、）」

「……。…お主の戦うべき相手は我の父上であらせられる『現魔王』のはず…故に『次期魔王』である我に挑むのはお門違いというもの…。いくら脳の腐ったお主とて今ので１３６２回目となる同文の説明を聞き続ければいい加減わかるだろう？」

「わかるわかる〜！…あぁ…長く艶やかな漆黒の髪はまるで月夜に流れる清流のよう…思わず触れてしまいそうな瞳は紅水晶…！気が狂ってしまいそうだぜホホーウッッ／／／／（´∀｀）！！！！」

こっちは精神が狂ってしまいそうだぜホホーウ。

「…ちゃんと聞いておるのか…？」

「もちッッ！！」

いちいち親指を突き立てるな。折ってしまおうか。

「ならば話しは早い…これで貴様とは…「それは違うぞアンゼルッッ！！」

「なっ…なにッ？！」

急にシリアス顔になった変態勇者は無礼にも我の手を不潔な手でしっかりと握り、欲で濁りきった瞳で見つめてくる。…本当、なんなんですかねこの人は…。正直、我、メッチャビビってるんですけど…足ガタガタなんですけど…察してよ！！

「…生まれたてのバンビみたいで可愛らしい…／／／」

ぁっわかってやってたの？？ホント殺ってしまいたいね♪

「アンゼル…オレは『勇者』としてここにいるんじゃない…君を『次期魔王』として見ている訳じゃないんだ！！」

えっそうなん？さっき自分で『俺達は運命の赤い糸で繋がった【勇者と魔王】』ゆってたやん。…マジでついていけんわ。

「…それでは何故我の元へ現れる…？」

「もうかれこれ２０５３６８回も伝えたんだ…わかるだろう？オレの気持ち…」

「なに…？」

「オレと…結婚してくださいッッッッ／／／！！！！」
「我男だしぃぃッッッッ？！！！ってか無理ッッ！！！！」
父上…一刻も早くこやつを葬って下さい……

## 第一勝　我、次期魔王（後書き）

意味わかんねっすね！！正直スマンかったッッ！！だが後悔は…していません…。がんばりますね……。

## 第二勝　にゃ～

ーバンッッ！！ー

「父上ーーッッ！！父上はおられますかーーッッ！！」

「んにゃっ？？アン坊っちゃんじゃないですかぁ～。お帰りなさいませぇ♪♪」

「！…ニャアか。父上はどこにおられる？」

「えぇ～？知りませんよぉ～。ニャアはアン坊っちゃん専属の家来なんですからぁ～（´ｏ｀）お父上様にまで手が回りませぇ～ん」

「むぅ……（＝＿＝）」

面倒だがここでニャアニャア言っている奴の事を少し紹介しておく。名前は『ニャア』…まんまだな…。猫の耳の様に跳ねた髪が特徴のこやつは、もう察した者もおるであろう…言わずと知れた【猫娘】だ。そしてニャア本人から説明があった通り、次期魔王こと我の専属家来だったりする。主に我の食事を横取りしたり、我の部屋の柱で爪とぎしたり、我のこずかいを盗んだり…あれ？ジャマばっかりしてね？？

「お父上様に何かご用なんですかぁ～？」

「ウム…変態勇者について大切な話があったのだがな…一体何処に行かれたというのだ、こんな時に！！」

どうして親というものは来なくて良いとき―（例：エロ本熟読中）には現れ、用があるとき―（例：『ご〇んですよ！』のふたがあかない時）には見つからないものなのか！！もうホント我、反抗期！！

「あぁ～またレイドさんの事ですかぁ～。アン坊っちゃんはホント

にレイドさん、好きなんですねぇ～（ｌｖ｜）！」
「レイド…？誰だ、そやつは？…聞いたこともないぞ…？」
「……。」
「……？」
「…アン坊っちゃん…せめて名前だけでも覚えてあげないとあまりに可哀想さんですよぉ？？『変態勇者』さんの名前ですぅ～！」
「…！？…あやつ…他に名前があった…のか…？！」
「……」

【変態】↑名字　【勇者】↑名前　とでも…？…アン坊っちゃん、さすがにそれはないですぅ～…。

「はて…何故ニャアはその様な事を知っておるのだ？」
「いや、だってぇ…あれだけしつこく名乗られれば誰でもぉ…（｜｜；）…で♪？今日は変態勇者さんと何があったんですかぁ～♪♪？」
「…おい、ニャアよ…前々から思っておったのだが…お主、我の不幸を楽しんではおらぬか…？」
「ギクリっちょッ（＾ｏ＾；）！？」
「…パックンチョ…（｜｜；）？？」

「そんなぁ～ニャアがアン坊っちゃんの不幸を楽しむ訳ないですよぉ～（＾＾；！やだなぁもぉ～♪♪」
「こっこれッ！鼻を弾くでないっ！」
「ニャアはただぁ～、ん～…何て言えばいいんですかねぇ～…まぁ、言っちゃえば腐女子なんですよぉ～♪だからぁ変態勇者さんとは仲良くしてほしいってゆうかぁ～」
「腐…？なんだそれは…？」
「わかる人だけわかればいいんですぅ～深く考えないでくださぁ～い♪♪」

これまでにない程のキラキラと輝く笑顔。その眩しさがなんとも胡散臭い。

「とにかく！我が変態勇者と友情を育むなど生涯、絶対に有り得ぬことだ！！」

「育むのは友情じゃなくて恋情ですよぉ～♪♪」

「死ぬッッ…！！死んでしまう…ッッ！！！！」←声にならない声

「アン坊っちゃんは変態勇者さんを邪険にしすぎですよぉ？…にゃっ！そういえば、その変態勇者さんから真っ赤な薔薇１００本の花束と手紙が届いてたんでしたぁ～♪♪ニャアってばうっかりさん☆♪」

「また来たんかァァァァッッ！！？要らぬッッ！！燃やしてしまえッッ（＝＿＝）！！！！！」

「ちょっちょっちょッッ？！！（大魔法↓）【黒炎】で燃やすのはタンマですぅ～ッッ！！！！手紙だけでも読んでみましょうよぉ～！！」

「ニャアよ！その紙切れを渡せェェェッッ！！」

「嫌ですぅ～ッ（＜＿＞）！！」

「わかった、わかった！一瞬…一瞬だけ我に渡せッ！そしたらすぐに返してやるから！！」

「そう言って、渡したらすぐ燃やしてしまうの、ニャアは知ってるんですからねぇ～（＿＿；）！！パターンはもう読めてるんですぅ！！」

「ぬぅ…！あやつめ…！知恵をつけおったわ！！」

今まではこの手で通用しておったというのに…大人の階段を一段踏み出したということか…！

「オメデトウッッ！！」

「にゃっ…？！…どうしたんすかぁいきなりぃ…（－＿－；）？…手紙、ニャアが読み上げますよぉ♪♪」

「イヤァァァァアッッッ！！！！脳が腐りはてる～～～ッッッ！！！」

【マイハニーアンゼル様】

やあ！元気かい？オレのエンジェル、アンゼル！！…今気がつきましたが、エンジェルとアンゼルって響きがよく似ていますね！！それはやっぱりアンゼルがエンジェルの様に…イヤ！それ以上に！！美しく可憐でいて、さらに気高く妖艶であるからだとオレは思います。あぁ…愛しいオレのアンゼル…！！月を見る度、君を想います…花を見る度、君を想います…食事の度、君を想います…エッチな本を見る度……アンゼル、君を想います…！！もぅ　本当に…好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす好きですす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛していますす愛しています……！！！！

レイドより、愛を込めて…（変態勇者って書いた方がわかりやすいかな（´∀｀）？？）

「………」

「…リアルに恐くないですかぁ…これぇ…？」

ー我の平和は…いつか取り戻す事が出来るのだろうか…？

## 第三勝　（、∀、）

「はぁ……」

「……」

「はぁ……」

「……」

「はあああぁぁぁぁッッ！！！！」

「ウルセええぇぇェェッッッッ（、Д、＃）！！！！少しは静かにできねーのかッッテメーはよぉぉッッッッ！！！！」→鈍器発射

鈍器直撃→「あいたぁぁッッ？！！」

「ため息でかすぎだろッッ！！ってか、ため息か今のッッ？！！」

俺は後頭部を押さえながら転げ回っているレイドのわき腹を、怒りに任せてゲシゲシと踏みまくってやった。…これがなかなか心地いい（、∀、）

「やっやめてくれスタンっっ！！確かにオレがわるうございましたぁぁ！！イテテッッイテテッッ！！？暴力はんたーいッッ（＜＿＞）！！！！」

「オラオラァ！！もっと許しをこえやぁッッ！！」

「いやだぁぁぁッッ！！ＳＭプレイはアンゼルとじゃなきゃうけつけませぇぇぇんん（＜＿＞）！！！！」

「ああん？そう言いながら俺にはお前が喜んでるようにみえんぜ？？」

「気のせいじゃボケェェェェッッッ！！！どんな目ン玉してんだぁぁぁッッッ！！？」
「ああっ？？」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…ッッ（Ｔ－Ｔ）！！」

今のオレは、この痛みから逃れる為ならなんだってできるんだぜ…！！そう、お望みとあらば靴だって舐めれちゃう予感ッ☆☆ウソウソ★★舐めたいのは愛しのアンゼルの靴だけねっ（´∀｀）♪♪

「スタンさん…何があったのかはわかりませんが…そろそろ許してあげて下さい…（＾－＾；）！レイドさんのＨＰがもうほとんど残っていませんし…」

「！…アイリス、戻ってたのか…ったくよぉ！コイツにはホント苛々するぜ！！朝からため息ばっかり…うるさくてかなわねーッ！！」
「アイ…リス…かっ…回復…して……！」
「あらまあ、ため息ですか…。レイドさん、一度のため息で一回分の幸せがなくなってしまうんですよ…？」

へぇそうなんだ☆でもでもっアイリスが早く回復してくれないと、一生分のレイドさんが亡くなっちゃうぞ★☆

「ははッ！！じゃあコイツの幸せ、今日のため息だけで一生分なくなったんじゃね？？」

ふふふふふ♪ホントだねッ♪♪一生分のＨＰがアレレ？？もうすぐで亡くなってしまいそうだぜ☆★オレ…このまま死んじゃうのかなぁ…（´∀｀；）？…だったら…最期の言葉は…

「アンゼルぅぅぅッッッ！！！！死んでもオレはッッ！！君の事を…！！一生愛し続けると誓うぅぅぅッッッ！！！！！！！」

「ッッ（＝＿＝；）？！！いきなり何言ってんだコイツ…ッッ？！！」

「ぁっ…！レイドさんのＨＰ、回復するの忘れてました…」

ーーあっはぁ☆♪いきなり二人も新キャラがでしゃばりだしてみんな、びっくらこいただろう??だからこ・こ・いらでオレの愉快な仲間を紹介しておこうかな??それじゃあ、一人目～いっくぞぉー！さん♪♪

口が悪い人↓スタン（男）剣士　：いつもオレを叩くんだぁ☆☆

それじゃあ、二人目～いっくぞぉー！さん♪♪

敬語の人↓アイリス（女）僧侶：いつもオレ達を回復してくれるよ★★

…こんなんでｏｋ??えっ?短いって?ゴメンゴメン☆だってオレさぁ…アンゼルの事以外、あんまり知らないし♪♪てへっ（´∀｀）☆★♪とにかく、『レイド勇者様御一行』のパーティメンバーってわけなんだぜ★★わかったかな??

ー「それはそうとレイドさん…どうしてため息なんかついていたんですか…？何か悩み事でも…？」

「いやぁ…アンゼルの事を想うとさ…こう、心臓がぎゅーッッてなって！バァァァンッッてなって！！ボキャァァァンッッて…！！

あぁ…なんでこんなに好きなんだろう…／／／／ため息が…エンドレスだぜ…／／／／！！」
「レイドさん…まぁ意味は伝わりますけど…（^＿^；）」
「おいおい…敵の息子に仮にも勇者のお前が惑わされてんじゃねーよ…！！」
ーそれってつまり…『恋わずらい』ってやつだろ…？チッ！！…そんなにアイツがいいのかよ…ッッ！！…俺なんて…ガキの頃からずっと……っ！！
「……ッ」
「スタン？おーいスター…「うっせ！！死ねやお前（、Д、）」
「やだッ？！ひどくなーいッッッ（、Д、；）！！！？何この人ーッ？！！…もういいよッスタンなんてプンプン！！…あ～ぁ～！せっかく『魔王退治』について、大切な話があったのになぁ～（、ε、）？？」
「『魔王退治』についてですか…？珍しいですね…」
「ハっ！聞くだけ無駄ムダ。どうせろくでもない事だっつの！」
「まぁまぁお二方、コッチへきんしゃい（、∀、）ホントに大切な話だから…♪」
「「……」」
ゴニョゴニョ……
「……本気ですか（・＿・；）？！」
「…本格的に脳が腐ってきたんじゃね（ー＿ー；）？！」

「フッフッフッフッ……♪♪」

ーアンゼル…君を手にいれる為だったら…オレは…何だってするぜ

（、∀、）？？

## 第四勝　おい、魔王

『ーアンゼル…君を手にいれる為だったら…オレは…何だってするぜ（´∀｀）？？』ーー

「キャァァァッッッ！！！？超こわぁぁぁぁぁいいッッッッ（（；´Д｀））！！！！！あやつ、我に何をするつもりいいいいいいッッッ！！！！？」

「『（´∀｀）』ってついてるあたりが更なる恐怖をあおりますねぇ～（ーv－；）変態勇者さんもそろそろ本腰をいれて、アン坊っちゃんを奪いにくるんじゃないですかぁ～♪♪？？」

どこか期待が込められた声で、物騒な事を楽しげにはきだすニャア。くぅ…ッ！！他人事だと思いおってっ（＝＿＝＃）！！

「ニャアーーぉッッ！！」

「にゃッ？！何するんですかぁ～（ー＿ー；）？！」

「お前は我の家来であろうッッ？？！全力で我を変態から守らんかぁぁッッ！！！！」

「イヤですよぉ～（キッパリ）そんな事したら萌えが無くなってぇ、ニャアが死んでしまいますぅ～。それよりも、抱きつかないでくださいよぉ～ニャアも一応、レディなんですからねぇ～～（ー＿ー；）？？変態勇者さんに抱きついてくださぁ～い♪♪♪」

「断固お断りするッッッ！！！！」

「なんばしよっと～？お二人さ～ん。おいもまぜて～

【訳：何をしてるの？お二人さん。俺もまぜて～】」

「！！」

ーその、気の抜けすぎた声…バリバリの方言…！！間違いない…このお方は…！！

「父上ッ！！」

「『魔王』様ぁ～（ーωー）」

「朝から元気のよかね～。おいなんて、もう体バキボキ（、ｏ、）そろそろ魔王業も引退せんばばい。

【朝から元気がいいね。俺なんて、もう体バキボキ（、ｏ、）そろそろ魔王業も引退しなくては】」

ーそうは言いつつも（方言で解りにくいが…）さすがは千年を生きる『現魔王』…外見年齢は息子である我とそう変わりはない。まぁ、我のが断然ピチピチだけどねッ！！

「父上ッそれは困ります！！老いぼれるのは勝手ですがその前に、変た…いえ、『勇者』を葬って頂かなければッッ！！」

「えぇ～…父さんもう疲れた～って～…。レイド君達、元気よすぎて辛かとよ～（ー｜ー；）やっぱ、若さは宝やね～！

【えぇ～…父さんもう疲れたんだって…。レイド君達、元気がよすぎて辛いんだよ（ー｜ー；）やっぱり、若さは宝だね！】」

「にゃ～…【訳】がうざい…（ー｜ー；）！！でも無いと意味不明だしぃ…」

「レイド…？誰ですか？そやつは…。父上！我が申していますのは『現勇者』の…」

「アン坊っちゃん、『レイド』さんは変態勇者さんの名前ですってばぁ～！いい加減、覚えてくださいよぉ～（＾－＾；）」
「え？…うそ…！」
「もぉ～アン坊っちゃんのおバカさん☆（´∀｀）♪！」
「こやつめ～やりおったな～★（´∀｀）！」
「いっやぁ～ん☆★（´∀｀）♪♪」

「なんね、この疎外感…眩しか～（；´Д｀）…ってか、『変態勇者』ってなん？？なんでレイド君に『変態』付いとると？？確かに少し、変わった子ばってん…
【なんだ、この疎外感…眩し～（；´Д｀）…ってか、『変態勇者』って何？？なんでレイド君に『変態』付いてるの？？確かに少し、変わった子だけど…】」

「なっ…何でもありませんッッ！！」
「え～？な～んか怪しかぞ～？？父さんになんか隠し事、しとらんや～？？
【え～？何か怪しいぞ～？？父さんに何か隠し事、してないか？？】」

「しとらんってッッ！！
【してないですッッ！！】」

ー親というものは、子供のそういう…思春期的な話を見つけるなり、からかって楽しみ倒すという厄介な性質をもっておる…。もし…『娘』ではなく『息子』の我が…『男』である変態勇者に迫られている（しかも変態的に）と知られでもしたら…！！
我、終わる…ー

「魔王様ぁ～♪実はですねぇ～変態勇者さんはアン坊っちゃんの事を…フガッッ?!」
「言わせるかァァァァッッッッ!!!!!」

「本当、仲の良かね～父さん羨ましかばい！おっ？もう、こげん時間やったったい。レイド君達との待ち合わせに遅れるとこやった（´∀｀）！
【本当、仲が良いね～父さん羨ましいよ！おっ？もう、こんな時間だったんだね。レイド君達との待ち合わせに遅れるところだった（´∀｀）！】」

「待ち合わせぇ～？変態勇者さん達とですかぁ？？」
「そうそう。戦うにしてもお互いの用事ってあるやろ？？やけん、あらかじめこうやってレイド君達と、戦う場所と日時ば決めとくとよ♪
【そうそう。戦うにしてもお互いの用事ってあるだろ？？だから、あらかじめこうやってレイド君達と、戦う場所と日時を決めておくんだよ♪】」

「…へぇ～…そうだったんですかぁ…（ーωー；）（何か変じゃね…（ー＿ー；）？）」

「ふむ！『魔王と勇者の決まり事の条約』第六条、ですな！！」
「にゃ～…条約ぅ～（ー＿ー；）？？」
「うん！じゃ、父さん行ってくるばい！！
【うん！じゃ、父さん行ってくるね！！】」
「ぁっ父上、行かれる前に一言だけ…」

「ん？どがんしたと？？
【ん？どうしたの？？】」

「…ぶっ殺してきてください。」

「えっ……？！」

ーアン坊っちゃん…あまりの殺気を含む声に、父上様が怯えてますよぉ…？！

## 第五勝　愛ゆえに…

ーガサッーー

「！…現れたな、魔王…！」

「フッ……」

約束の場所で既に待機をしていた勇者・レイド率いる、剣士・スタン、僧侶・アイリス、その他・数名は、深闇の気配を放ちながら、一人の家来と共に現れた『魔王』の黒い気迫に息を飲んだ。さすがは夜の者を従える闇の王…それはあの変態勇者でさえも怯ませた…ー

「やぁ～レイド君達、待っとった??もう、おいも年やもんけんね～忘れそうやったばい（、∀、）！！」

…これが無ければ。毎度これで皆の緊張の糸は強制的にちょぎられてしまうのである。…何故に方言…（ー＿ー；）？

「体もバキボキやもんね～」

「…なぁ…いつも言ってるけど…あんたが何言ってるのかオレ達にはちょっと…（ー＿ー；）」

「ぁっ…！！そやった…コホン。…これでいいかな？レイド君」

にっこりと、魔王らしからぬ微笑みを一つ。…アンゼルもこんな風に微笑んだら、更に可愛いんだろうなぁ（＊、∀、＊）♪♪いや～ん／／／♪♪！！

「レイド君は、何を一人でニヤけているのかな??」

「いえ…気にしないで下さい…どうせヨコシマな事を考えているだけですから…。レイドさんはいつもこんな感じなんです…（＾＾；」
「ホンット恥さらしも、いいとこだぜッ！！」

乾いた笑顔のアイリスちゃん、チッ！！と、憎々しげに舌を打つスタン君…君達、本当にレイド君の仲間とよね…（＾v＾；？　その他・数名の子なんて名前さえ出とらんし…喋らんし…

「魔王様…！もうすぐでいつも楽しみになされているお昼ドラマが始まるお時間ですわ！速急にこやつらを片付けてしまわれないと…ッ！！」

「ああ～そうやった！間にあわんたい！！…と、いうわけでレイド君達の方も準備万端のようだし、そろそろ殺りあっちゃう？？息子からも『レイド君達を倒してきて～パパ～（´∀｀）』って、お願いされちゃってることだしね♪久々に本気出しちゃおうかな～♪♪」

方言と標準語混じりに、涼しげな笑顔で恐ろしいことをほざく魔王。本気でくるとかマジありえなくない？？勇者軍、一瞬で死んじゃうじゃん。…うん、なんていうか…聞かなかったことにしようそうしよう！！…それにオレ達の、今回の目的は…（´Д｀）！！

「魔王！！実は『勇者』であるオレから『魔王』のあんたに、大切な話があるんだッ！！」
「大切な話…？もしかしてプロポーズとか？？いやーんオジサン、困っちゃうぅ～（＊＾ー＾＊）＜♪♪」
「近い！！けど、違うッッ！！」
「近いのッッ（＝＿＝；）？！！オジサンびっくりッッ！！！！」
「あら、おませな勇者君なのね。だったら、お姉さんが優しく可愛がってあげるわよ？」

レイド君の発言に目ばうっとりと歪ませたのは、さっきドラマの心配ばしよった、おい専属家来のミヤコ…やっと名前の出てきたね（＾＾；

「…美女からのアプローチ…確かに男にとってこれ以上ないくらい魅力的なお誘いなんだろう…がしかし、ここはあえてご遠慮いたす！、なぜならそう！！オレには既に心に決めた人がいるのさぁぁぁハッフーンッッ（＊＞∀＜＊）！！」

「ウフフ…可愛い子ねぇ♪お姉さん、一途な子はもっと大好きよ♪」

「こらこら、ミヤコ、こがん若い子ば誘惑したらいかんばいっていつも言いよるやろ（；＾｜＾Ａ）！…でも初耳だなぁ、レイド君に好きな子がいるなんて♪やっぱり…あの子（´ψψ）？？♪♪えっもしかして、すでに両思いだったりする♪♪？！」

何を勘違いしているのか、にやけながらチラチラとアイリスの方を見ている魔王…アイリスは、ハンっと鼻をならした。

「その質問、今まで何人の人にされてきたと思っているんですか…（＾ー＾）？…私とレイドさんはその様な関係ではありません。言っておきますけど、ＲＰＧ的な世界において『勇者』には『回復役』のヒロインが寄り添うものなどとそんな勝手な思い込みは、やめて下さいね…魔王さん（＾ｖ＾）くだらない話はもういいのでさっさとレイドさんから話を聞いてください。」

「はい…ごめんなさい（＾＾；！レイド君の大切な話、聞こうかな（＾ｏ＾；）」

「えっそう？？じゃぁ、ご遠慮なく～いくよ（´∀｀）♪？…

『魔王、オレ達はもうあんたと戦う気はない！』

っていう事なんだけど♪」

「へぇ～……ぇっ…は…いっ（・ω・；）？」

オレの発言に、目をてーんとさせた魔王とその家来。あ、驚いちゃった（、∀、）？？やっぱり驚いちゃうよね～♪♪

「…勇者君は何を言いたいのかしら…？お姉さん達、ちょっと意味がわからないんだけど…（｜＿｜；）」

「えっと…レイド君……それはどういう事なのかな…（；＾＿＾Ａ）？…自分が言ってる言葉の意味、ちゃんと理解出来てるんだよね…？！」

「もちッッろんのすけッッ（＊＜ｖ＞＊）！！」

「うわっなんかムカつく…ッ（＾ｏ＾；）！！」

「…オレはもう…あんた達、魔族とは戦いたくないんだ…いや！！戦えないんだよッッ！！！！」

「なっ…なんで…？！」

「……息子さん…アンゼルを！！

『愛している』

からですッッッ！！！！」

らですっっ！！！

です！……

す！……

！……（^_^；）？！

## 第六勝　なんてこったい…

魔王の城ー

「ぬおわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッッ！！！！？」

「にぃやぁぁぁぁぁぁぁッッッッ（＝Д＝；）？！！！どうしたんですかぁッッアン坊っちゃんッッッッ！！！！？体の震えが尋常じゃないっすよぉッッ？！！」

「わからぬ…ッッ！！わからぬが…ッ…急にとてつもない悪寒が……ッ！！……一体…何だというのだ……（（；＝Д＝））？！」

それは、悪夢の予感……ー

一方、その頃…

ーー「……アン…ゼルを……愛している……？…レイド君が……（・―・；）？」

「はい……／／／」

「おいの…息子を……？」

「はい／／／」

「……」

…紅く染まった頬…恥ずかしそうに伏せられた、潤んだ瞳……そこにいる人物は確かに勇者であるレイド君のはずなのに、今のその姿は余りにも普段からは想像すらできない（てか、したくない）見慣れないものだった。…君、誰ね…？…なんで急に敬語になっとると…（ー｜ー；）？

「…レイド君…1つ、いいかな…？もしかして、勘違いしてるかもしれないし…。アンゼルは親のおいが言うのもアレだけど…確かに美しい。中性的な容姿もしている。だけどね……『男』…だよ（＾o＾；）？？」

「…魔王…あんた、何が言いたいんだ…？」

「え……ッ？！」

「勘違いしてるかもしれないって…？オレがアンゼルを『女』だと…？…容姿が美しいから、アンゼルに好意を抱いていると…？」

人相が１８０度、ガラリと変わったレイド君。ヤベッ…もしかして地雷…踏んじゃったかな…（＾v＾；？！『秘めたる勇者の力』とか、怒りパワーかなんかで『スーパーサ〇ヤ人３』とかに変身して、さらにスタン君とフュージョンとかされでもしたらどうしよう…！！魔王軍、一瞬で全滅じゃん…！！！

「魔王様…アニメのみすぎですわ（ー｜ー；）勇者君、落ち着いて！！魔王様はアナタを馬鹿になされている訳じゃないわ！！」

「…じゃあなんで魔王の奴、半笑いしてんだよ…？」

本気でヤバイ…レイド君、目がマジだ…ッッ（@Д@；）！！？

「それは魔王様の元々のお顔よッッ（ー Д ー；）！！いつでもにやけながら戦われているの、勇者君も知っているでしょうッッ？！！」

「そうそう（＾ｏ＾；）！！おいはいつもこがん顔やけん、別にレイド君ばバカにしとる訳じゃなかとよ！！アンゼルからもニヤニヤすんなって昨日も言われたし！！」

「魔王様！！焦りすぎて方言、バリバリですわ！？それでは勇者君達に言葉が通じませんッッ（ー Д ー；）！！！」

「やっぱり馬鹿にしてるんだな…ッ！！…わかった…そっちがその気なら…！！！！」

「ちょッちょッ？！！違うってッッ（＝Д＝；）！！！！！」

ーレイド君の周りを、ただならぬ聖なる光が包む…あぁ…もうダメぱい…父さん、ここで死んじゃう…！！さよなら…アンゼル…（；´∀、。）！！

「レイドさん！」

？！…アイリスちゃん…？

「魔王さんに危害を与えてしまいましたら、アンゼルさんを手に入れられなくなっちゃいますよ…？いいんですか（・＿・）？」

「ダメェェェェェぇぇぇぇぇッッッッ（／Д、。）！！！！！！」

当たるッッ！？という所で、レイド君の放った得体の知れない強大

な光は散って、跡形もなく消え去っていく…恐らくアイリスちゃんの言葉で、レイド君が思いとどまった為だろう…助かッたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッッ（＝Д＝。；；）！！！！！！！アイリスちゃん、ナイスッッッ！！！！！

「でしたら、ちゃんと魔王さんと話し合って下さい。終戦はレイドさんの出された提案でしょう…？」

「うん……ごめんなちゃい……（／o、。）でも、魔王！これだけは聞いてくれッッ！！…オレは『男』が『男』を…『女』が『女』を好きだという事実を、ちっとも恥ずかしいとも変な事だとも思わないッッ！！好きなものは好き！！そこには誰かに馬鹿にされる理由なんて一つも存在しないんだッ！！」

「！！」

「オレは…本気でアンゼルを愛しているッッ！！！」

「レイド君…」

ーなんて綺麗で真っ直ぐな瞳ばしとるとかね、この子は…（＾＿＾）

「…アンゼルのどういう所が好きなのかな…？良かったら聞かせて（＾ｖ＾）？」

「はいッッ！！！魔王…いえ、お父様、喜んでッッ（＊、∀、＊）！！！」

「『お父様』…（＾＿＾；）？！」

「アンゼルの好きなところはですねぇ♪い～っぱいありすぎるんで

すけど♪♪まず、あの噛みつきたくなる程美しい髪から微かに香るシャンプーの匂いはたまらんですなぁ／／／（＊；´∀｀＊）そして舐めたくなるような白い素肌は……ーーーーーーーーー…

ーー「って今日、レイド君が言ってたけど……どうゆう事…？アンゼル……（^＿^；）？手紙とかも貰ってたって…？」

「……」

「ちゃんと話してくれんと……」

ー我、終わったーー…

ー燃え尽きたぜ……真っ白にな……！（燃えてないけど）

## 第七勝　1

ーーコンコンッーー

「アン坊っちゃん、開けてくださぁ～い！お食事ですってばぁ～！！」

「……」

「もう～～！！ドアを開けてくれないとお食事、ニャアが食べちゃいますよぉ？！」

「……」

「アン坊っちゃんのお好きなオムライスなんですけどねぇ～？？もちろん、ミルクティーもありますよぉ♪♪」

「……」

「……にゃ～…ダメだこりゃあ（ー ω ー；）相当に精神をやられてるみたいですなぁ…（＾＾；」

まぁ…ムリもないですかねぇ……なにせアン坊っちゃんは、変態勇者さんとの関係を魔王様に知られてしまう事を何よりも恐れていましたしぃ…。…確かにこういうデリケートな事は、特に親には知られたくない事ですもんねぇ（・ω・；）といっても、ニャアはまだアン坊っちゃんと話していないからどこまで知られたかはわからないんですけどぉ。とにかくアン坊っちゃんは昨日、魔王様と二人きりの部屋で変態勇者さんから受けてきたセクハラ（？）について

色々と聞かれて、相当恥ずかしかったみたいですぅ…そのせいで昨日から全然、ご自分のお部屋から出てきてくれないどころか、返事すら返してくれないんですよぉ～（ー｜ー；）やれやれ。

「そっとしときますかぁ～…」

「ニャアちゃ～ん／（＾o＾）／♪♪」

「にゃっ？…ミヤコねぇーさんじゃないですかぁ～」

「もう！ニャアちゃんったら！！私の事は『ミヤコ姉様』って呼んでって、いつも言ってるでしょ（＾｜ー）～☆♪♪そんな悪い子には～抱きついちゃうｗｗ」

「ぅおお…ッッ（ー｜ー；）？！」

「うふふ…♪♪ニャアちゃんってふにふにしてて、抱きここちいいのよね～♪もち肌～（＊、∀、＊）」

「にゃー……（；´д`）毎度毎度、ホントに飽きないんですねぇ…」

『魔王様』専属家来の『ミヤコ』ねぇーさん…といっても、ニャアと血が繋がってる訳じゃないんですよぉ？先輩だから『ねぇーさん』。ちなみに竜の血を引くミヤコねぇーさんは、自身がセクシーなせいか、かわいらしい少年とか…あと『猫』が好きらしいんですよねぇ～だから『猫娘』であるニャアはいつも被害にあってるんですぅ（＾＾；

「ところで、ニャアはミヤコねぇーさんにお聞きしたい事があるんですぅ…」

「あら♪？何かしら（＊、∀、＊）？？」

「昨日の、変た…じゃなかった、レイドさんとアン坊っちゃんについての話なんですけどぉ…」

瞬間ピタリ、と笑顔を凍りつかせたミヤコねぇーさん…と思っていたら次に辺りをキョロキョロと一通り警戒し終えて、またニャアへと視線を戻す。表情の余りもの険しさにここだけの話、危うく吹き出しそうになってしまいましたぁ。

「…私もニャアちゃんに話を聞きたいと思っていたのよ…。でも、ここじゃちょっと…とりあえず私の部屋に移動しましょう！！」

ーー「本当、勇者君には驚いたわよ…いきなり『魔族とはもう、戦いたくない！！』だもの…！さらにその理由が、アンゼル様を愛しているからだって……さすがにあの魔王様も、ぽかーんってされてたわ…（ー＿ー；）」

「あわわ…（^^；？！レイドさん、そんなにハッキリとアン坊っちゃんへの気持ちを魔王様に伝えたんですかぁ～…！？しかもそれが理由で、終戦したいとぉ…？？！」

「そうなのよ…ニャアちゃんは昨日、アンゼル様から何も聞いていないの？」

「はい…アン坊っちゃんは魔王様とお話されたあと、そのままご自分のお部屋に引きこもってしまわれたので、そこまで詳しい話はまだなにもぉ…（ー＿ー；）」

「勇者君…変わった子だとは思ってたけど…しまいには、魔王様の

事『お父様』なんて呼びだしちゃうし。…アンゼル様の髪の匂いが堪らないとか、腰のくびれにしびれるとか……心底幸せそうに、にやけながら話していたわ…」

「……（ーωー；）」

変態勇者さん…さすがにそれはちょっと、アン坊っちゃんがかわいそですよぉ（＾＾；？？

「ねぇニャアちゃん…この関係っていつからなの…？」

「え、あ～…っとですねぇ……いつからと聞かれましても～…（ー―；）…実はニャアどころか、アン坊っちゃんでさえもわからないんですよぉ」

「アンゼル様もわからないって……えっ？どういう事？！」

「それがですねぇ、アン坊っちゃんの話によると、会っていきなりプロポーズされたらしいんですよねぇ～」

「プロポーズ？！！はやッッ！！！！」

「交際をすっ飛ばして結婚の申し出ですよぉ～（＊＾ｏ＾＊）♪♪」

「ニャアちゃん、何か…嬉しそうね…（ー―；）？…まぁそれでね、ここからが大切な話なんだけど…勇者君が提案した『魔族と人間の争い』の『終戦』の件でね…実は明日、改めて魔王様と勇者君が話し合うことになったのよ。…で、そこで…『次期魔王』様であるアンゼル様も必ず来てほしいって…魔王様の方もそれには賛成で、たぶん勇者君のアンゼル様への気持ちが本当なのか、お確かめになりたいんだと思うわ」

「なるほど…確かにアン坊っちゃんがぶっちゃけ、『終戦』の提案がでた原因という事になりますから…当然と言えば当然ですねぇ～」

「でも…そのアンゼル様が勇者君との話し合いを強く拒まれているって魔王様から聞いたのよ～！！ねぇ、ニャアちゃん、どうにかア

ンゼル様を説得してくれないかしら??」
「もちろんですよぉッッ!!!萌えの為にもぜひ、アン坊っちゃんには話し合いに参加してもらわないといけませんッッ!!!!」
「なっ…なんだかわからないけど、ニャアちゃんが燃えているわ…ッッ（＾０＾；）!!?」

「ニャアに任せてくださいッッ（＜ω＞）♪♪!!」

ーなんだか、おもしろくなりそうな予感ですぅ♪♪

## 2

ーー「はぁ……」

なんとも憂鬱な気分だ…最悪でたまらない…！…昨日、父上の奴…明らかにひきつり笑いしてたし（｜＿｜＃

『つまり…アンゼルは、レイド君にその…迫られとったっ…て…事よね…（＾o＾；）？』

……思春期を迎えた事のある者にはこの言葉を親に言われた時の、我の気持ちを手にとるように理解し、共感して頂けるのではなかろうか。…静かな部屋で父上と二人、妙に気を使われながら変態勇者から受けてきたセクハラ（？）について問いただされるあの…我の何ともやるせない…恥ずかしい気持ち…とてつもなく気持ちの悪い、思い出すだけでゾッとする…気まずい空間……ーー

「く…ぬぁぁぁぁぁぁッッ（、д、）！！！変ッッ態勇者のあンちくしょうめがぁぁッッッ！！！！！父上に一体何を話しやがったのだァァァァッッッ！！！！！」

ウワァァァァァァッッッ！！！！！と馬鹿みたいに奇声（↑自分でも理解はしている）を発しながら、ベッドの上でいも虫のようにウネウネと転げ回る。跳ねる。落ちる。（↑ベッドから）冷静になる。何ともいえない虚無感に苛まれる。怒りが沸き上がる。恥ずかしさが襲いかかる。ホォウゥゥゥゥゥゥッッッッ！！！とアホみたいに奇声（↑自分でも理解はしている）を発しながら…エンドレス。

「…変態勇者の為に何故我がこのような想いをせねばならないのか…！！」

我は枕に問いかける。

…返事がない。ただの枕のようだ。

こんな事になるなら…本気で変態勇者の奴を消し去っていればよかった。

…何故、殺らなかったのか？

…いや、殺ろうとした。

…殺ろうとはしていた。

むしろ、殺っていた。

殺っているつもりだった。

では何故、奴はいまだにピンピンしている？？

……。

……。

……。

わかんない（・∀・）♪♪
わかってた～ら～悩まな～い（、∀、）♪♪

「わあぁぁい／（＾ｏ＾）／♪♪アッハッハぁん／（＊、∀、＊）／♪♪」

部屋中を満面の笑みでくるくると舞い踊る。タンスに小指をぶつけても気にしな～い♪花瓶に頭をぶつけても痛くな～い♪♪瞳から暖かいしずくがこぼれ落ちても我、知らな～い♪♪♪

「どうにでもなれ～／（（＊、∀、＊））／♪♪♪」

「…アン坊っちゃん…（＝＿＝；）」

「？！……ニャア……いつの間に……？」
「いや…ッあのぉ…（＾ｏ＾；）！！」
「……」
「……（・ω・；）」

「ラララ～（＊、∀、＊）♪♪ニャアも共に踊らんか～♪♪？」
「しっかりして下さいぃ～ッＴＴ＿ＴＴ！！」

ーー「もう…アン坊っちゃんってばぁ～、少しは落ち着きましたかぁ～？？」
「ウム……お前のパンチ（拳）をくらえばさすがに、な…。左頬の痛みの凄まじさに、脳も覚醒するというものだ（－＿－）」
「やめてくださいよぉニャアが怪力暴力娘みたいじゃないですかぁ（＜＿＞）！！」
「…我の顔、右に歪んでおらんか？」

「そんなに強くぶってませんってば～（；´ ω、）！！！！」

全くおおげさなんですからぁ～と、ほざくニャア。おおげさってお前…（ー｜ー；）コレ、おおげさか…？！ぁっ…やっぱり顔、右に歪んでる…

「アン坊っちゃん…ミヤコねぇーさんから話、聞きましたよぉ？明日、変態勇者さんとの話し合いがあるそうじゃないですかぁ～」

「！……我はそのような…明らかに怪しい話し合いになど、行かんぞ…！」

「どうしてそんなに拒むんですかぁ～！変態勇者さんも来るんですよぉ？？」

「だから、行きたくないのだろうがッッ（；´ Д、）！！ニャアよ…一体、何が言いたい…？」

ニャアが何か良からぬ事をたくらみ、考えて我の部屋に来ていることは元々、わかっている。…でなければ奴はわざわざ、ドアの鍵を無理矢理解除（↑盗賊か）してまで部屋には来るまい…（ー｜ー；）

「え～とですねぇ～、…アレ…何でしたっけぇ（・ω・；）？…にゃっ！そうそう、大切な話なんですけどぉ～」

「…大切な話を今、一瞬忘れたのか…（ー｜ー；）？」

「アン坊っちゃんは一度、変態勇者さんとちゃんと話し合うべきですよぉ！こんな迫られるだけの関係でいいんですかぁ？？これじゃ、前にも後ろにも進みませんし…なにより今回は『魔族』と『人間』

両方にとって、とても大切な話し合いっぽいですよぉ？」

「…それは解っておる…（ー＿ー；）…『終戦』…変態勇者の奴は何を考えておるのか…何故今頃になって…？」

ーー誠にそれが可能だとでも…？

ーーその心に嘘、偽りがないと…？

「それはニャアも解りかねますけどぉ…ま、何はともあれ直接話をしてみないとわからない事って、あるんじゃないですかぁ～？」

「……」

「魔界と人間界の関係はアン坊っちゃんと変態勇者さんにかかっているんですぅ…ね♪♪？だから会ってみましょうよぉ♪♪ハイッ決まりぃッッ（＊＜ω＞＊）♪♪」

「え……（ー＿ー；）」

ーあっ…やっぱ、行く感じ……？

## 3

―「アンゼル……」

今夜はなんて月の光が美しいことだろう…アンゼル……まるで君を見ているかのようだね――

――明日…君は来てくれる…？…それとも……――

「……君に…あいたい…（＊´д`＊）ょーぅ！！」

…ちょっと一言。……たしかこの話ってオレとアンゼルの愛の物語だよなぁ……？……【第一勝】以来、一度もアンゼルと会話どころか会ってるシーンさえないんですけど……？何コレ？どんな話？？……いい加減もうホント、本当にキレちゃうだゾ（＾ｖ＾）

「まさか…このままオレ達二人の仲を引き裂こうと？！！なんッッてクソッタレな世の中なんだぁぁぁッッッホォウウウウウウウ！！！！あいたいあ゛い゛た゛い゛～～。（ノД`）。。。！！！！！」

「レイド…何を赤子のように泣きわめいているンダ？」

「父ちゃん…！！」

「フッ…この泣き虫メ…だガ、どんな時であろうとも気を緩めてはいカン！お前は皆の希望の光…【勇者】なのだカラ…！！」

「希望の…光……」

月の逆光を背に浴びながら、親指を突き立てワイルドに微笑むオレの父ちゃん…今は昔、【魔王】を打ち倒すべく正義の名の下に剣を掲げた【伝説の勇者デイル】…オレの大先輩…いや、大師匠だ。剣技、心得、生きる術…この人に【勇者】の全てを教わった……

……んだけど、

「…また、よれよれランニング（白肌着？）だけで出歩いて…父ちゃん、いい加減風邪ひくぞぉ…てか恥ずかしいし（；＊´Д｀＊）！！」

「ムッハッハッハッ（´∀｀）♪♪ワシは【元・伝説の勇者様】ダゾ？？どんな格好をしていようガ、どんなに歳をとろうガ勇者様の気迫が失われるような事ハ……ぶぇしぃッッ！！！！！」

「びゃぁぁぁぁッッ？！！きったねぇぇ（（；´Д｀））！！！唾が、モロに口の中にィィィィ！！！？しかも鼻水ついたぁぁーーーッッＴＴ＿ＴＴ！！！！！」

「スマンスマン（´∀｀；）ずびび……びゃおぉぉぉッッ！！！！（↑くしゃみ？）」

「わーーおッッ（＜＿＞）！！！！？」

―かつて【伝説の勇者】であった上に、容姿も中の上（上の下）だった事から女の人（特に奥様方）にモテモテだったらしいオレの父ちゃん……でもそんなのは昔の事。今は…申し訳程度に生えた髪の

毛、ぶよぶよのお腹、晩ごはんで食べたお好み焼きの青のりがついた前歯、そしてさっき言った様に、白い肌着に、更に色落ちしたハーフパンツ……（；´Д｀）えっ？何故、父ちゃんの語尾がカタコト（英語混じり…？）なのかって？？…さぁ…？その答えはむしろ、オレが聞きたい。とにかく、…現役バリバリだった頃の父ちゃんを知っている人が今のとーちゃんを見たら、まずびっくらこいてひっくり返っちゃうね。…いつかオレもこうなっちゃうのかな…遺伝子的に（（；´Д｀））？！！
イヤン！！アンゼルに嫌われちゃう！！！！

「父ちゃん！！明日の話し合いには、ちゃんとした格好で出てくれよなぁ！！そんなんでも昔は一応、伝説の勇者だったんだからさ！！」

「ククク…話し合い…カ……何がどうなって、こんな事になっちまったんだかナァ…（＾。＾）？？レイド、お前は本気で魔王と話し合う気なノカ？…言っておくガ、これは簡単な事じゃなイゾ？お前は皆を守ル、希望の勇者…失敗しましタ～ｒ（´∀｀）ノでは済まさレン。」

ゆったりとした口調の中に混じる厳しい声音ーー父親としてだけではなく、先輩としての言葉だという事をオレは昔から良く知っているーー

だけど。

わかっているさ

「父ちゃん、オレは本気なんだ…本気でアンゼルを愛している…！！だから……」

「ｏｏｈ（ー＿ー；）……」

「【魔族】も愛せる…【人間】だって【魔族】を愛せるんだ！！そしたら【魔族】だって【人間】を愛してくれる…【人間】も【魔族】も愛しあえる！！オレ達は手を取り合い、互いを支えあっていける筈なんだ！！！！この想い、わかってくれよッッ！！」

「ヤレヤレ…相変わらず我が息子ながら熱い奴ダヨ……しかシ、魔王もそうだガ…『ミグーラド王』もよくお前のとんでもねぇ提案をのんだもんダナ。あの王…本当にワシ達人間の事を考えておるのヤラ（ー＿ー；）…もしやお前…王や魔王には何も了解を得ズ、独断で決めたんじゃないだろウナ？！」

「ンな訳ないだろ（；´Д`）！！？いくらアンゼル一筋（●´艸）のオレでも一応勇者としての自覚はあるのさぁぁ！！魔王には誠心誠意をもって話したから話し合いを了解してくれた！…ミグにも事前にちゃんと了解を得てたし、オレの提案は『人間と魔族の両方にとっても悪い話じゃない』とも言ってくれてたんだぞ！」

「『ミグ』ではナイ！！『ミグーラド王』だろウガ（；´Д`）！？」

ああもう、父ちゃんはいちいちうるさいなぁ（ー＿ー；）…『ミグーラド王』ーもとい、『ミグ』とは…みんな、思い出してほしいーーこういう【ロールプレイング（ＲＰＧ）】的な世界の事を。ほら、【勇者】と【王様】ってさぁ…助け合ってるっていうか、協力し合ってるっていうか、仲間には必ず一人はいるというか…とにかく、なんにしても【勇者】と【王様】は何かしらの深い繋がりがある。そう、まさしくオレとミグはそんな関係。簡単に言っちゃうと

要するに……危険な為、戦闘などは出来ないけど、俺達人間の代表者（一番偉い人）である【王様（ミグ）】に代わり、危険な事を任せられるのが【勇者（オレ）】という事なんだよ♪♪しかも、歳も近いし昔からオレ・スタン・アイリス・ミグーラドは仲良しなんだぁ♪♪わかったかなぁ（ ノ≧≦∀）ノ ？？…あらい説明&長文でゴメ～ンちゃい（´∀｀）

「まぁ、本当は明日の話し合いにもミグ本人は参加する気満々だったし、オレ的にもそれがよかったんだけど…さすがにそれは危険だからって理由で、ミグの出席を他の奴らに止められちゃった～（ー｜ー）」

「当たり前だろうガ（；´Д｀）！！そんな危険な場ニ、王を出席させようとする奴があルカ！！…まぁいイ…レイドよ、最後に問うガ…お前は何故、魔王の息子にそこまで惚れ込んでイル？其だけの何かガ、奴にはあるというのカ？」

「あるよ」

「！…即答なんダナ…ククク…それでは明日、その『アンゼル』とやらをじっくり拝ませてもらうとすルカ♪久しく魔王の奴に会うのも悪くはナイ（＾ー゜）」

「絶対…驚かれると思うけど（今の父ちゃんの姿に）…ふふふ（〃艸〃）明日、アンゼルにあえる（かもしれない）んだぁ～（●´艸）うれぴー♪♪もう今夜は興奮して、たぶん眠れませんなぁ（；＊´∀｀＊）！！」

「あほカ（ー｜ー；）明日に備えて今日はもう眠らんカイ。ほらほ

ら早く家にカエレ、帰レ」

「じゃあ、先に帰ってるからな♪」

そう言っテ、一度も振り返ることもなく走り去っていくレイド。

「フッ……どこで育て方を間違っちまったカナ…？よりにもよって『次期魔王』とハ…」

―レイドよ……悪いガお前の想いは決シテ……―

報われることはナイ――

## 3（後書き）

……内容、わかりにくッッ（（；´д`））！？

# 第八勝　1

ー話し合い当日ー

「むぅ……（ー｜ー；）」
「いっや～ん♪その御召し物（服）…アンゼル様ったら、なんでもお似合いになられますのね♪お可愛らしくてお美しいわ～（●´艸）♪♪勇者君が夢中になるのもわかっちゃう～♪」
「あ、やっぱりミヤコねーさんにもわかっちゃいますぅ～♪?！昨日一睡もせず、一生懸命アン坊っちゃんの衣装を考えた甲斐がありましたぁ～♪♪」
「ニャアちゃん、とってもグッドなセンスよ♪♪」
「……（ー｜ー；）」

ーテンションひっくぅ～い←我をよそに何故かテンションMAX→でキャッキャッとハシャギまくっておるニャアとミヤコ。…いやいや、チョイとお待ちよ、お二人さん。ニャアが考えたという、今、現在の我の格好……何ていうか…まぁおかしくは無いのだが…てか、むしろ異様に豪華というか……気合い入りすぎじゃね？我、明らかに一人浮いてるよね？周りに馴染めず、何だか目立っちゃってるよね？えっ何アイツ？なんで気合い入れてんの？ってなるよね？…てか、恥ずかしいよね…（〃艸〃）？！

「…これではまるで…我が一人、気合い入れまくりに見えぬか…？」
「だ～いじょ～ぶですよぉ♪♪とぉってもお似合いですからぁ～（^ー°）d」
「う…うむ……」

…選んでもらった（頼んではおらんのだが）手前、断るのもなぁ…という事で現在に至る。ハァ…コレで変態勇者の奴等に会うのか……

「父上…我の格好はちと派手ではありませんか…？」

「あはは～大丈夫さ～（´∀｀）全然、変じゃなかよ～似合っとる、似合っとる（＾ｖ＾）」

「そ…そうですか…？それなら、良いのですが…気合いを入れすぎているようには見えないのですね？！」

「ん～…まぁ……あっでも、レイド君なら喜ぶと思うばい（＾ー。）」

……ちっ！！大丈夫とさとしておきながら、最終確認でのそのあいまいな返事！！ハッキリとした答えが欲しいものですなッ（＾ｖ＾＃！！

「いや～それにしても、アンゼルが参加してくれてよかった～！父さんだけじゃちょっと…どわんすれば良かか、わからんけんね…（＾＾；アンゼル、レイド君との話し合い…任せたばい！！」

「レイド……？そういえば先程もその名が出てきましたな…はて、そやつは誰の事でしょうか？今日の話し合いに参加する者ですか…？」

「や……誰って…勇者君の事やけど…（・―・；）」

あぁ～…そうだったのか～という具合に納得するアンゼル。……レイド君の名前、まだ覚えとらんかったとね……（＾＾；

「でしたら、嫌です。我に任せられても困ります。大体、現勇者は父上の担当ではないですか！」

「まぁまぁ、父さんもそろそろ現役引退時やし、もうじきアンゼルに…」
「魔王様！アンゼル様！まもなく、勇者君との約束の場所に到着致しますわ」
「あ、本当ばい」

ー遂に到着してしまったか…（｜＿｜；）…気が重い。帰りたい。てか我、何故来たんだろう…。あっそうか、ニャアの奴に無理矢理連れ出されたのだったな……。……帰ろうかな？今さら帰っちゃおうかな？……よし、帰ろう！！

「アン坊っちゃん～そうはさせませんよぉ～♪??」
「ニャア！？はっ放さんか…！！」
「イヤですよぉ～♪観念してくださいねぇ♪♪」
「アンゼル、帰ったらイヤッて～！！父さんば置いていかんで～（＜＿＞）！！」
「アンゼル様！！ここまで来たんです！あと一踏ん張りですわ！！！」
「ぬぉぉッッ？！なんだ、お前達はぁぁ（；´Д`）！？」

我の背後から両肩を掴むニャア、その後ろに父上、さらにその後ろにミヤコ。一列に繋がる我等。…なんだこの寂しいシュッポッポは。

「アンゼル号、はっし～ん（＞ω＜）♪♪」
「我を先頭にするな～ッ（；´Ｏ`）！！」

「アンゼル！！」

「？！…変態勇者…」

いつから見ていたのか少し離れたその場所に変態勇者は立っていた…真っ直ぐに我を見つめて。…瞬間、我は走り出していた…変態勇者の元に。

『一発ぶん殴り倒したい』

その想いだけが脳を支配する。その想いだけが我を突き動かす。…だから忘れていたのだ、今の自分の格好を。この動きにくい服装をーー

「ウルァァァァァッッッッ！！！！！変態勇者ァァァァァッッッッ（、O、＃！！！！！」

「アンゼル～（＊、∀、＊）！！！！！」

服の裾につまずく我、両手を広げて待っていた変態勇者、転けた勢いのまま変態勇者の胸へと飛び込む我、慌てて我を受け止める変態勇者……思わず目をそらす父上…ガッツポーズで飛び上がるニャア…しんと静まり返る他の者……

「アンゼル…大丈夫か…／／／／？」

頬を赤らめ、ウットリと我を見つめる変態勇者…いまだに変態勇者の腕の中にいる我……

……どうしてこうなった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8318v/

---

勇者が次期魔王を愛しすぎてる件

2011年10月26日02時09分発行